知的障害者の自立概念に関する根源的考察
－実体験等から問い直し－

社会福祉学専攻　髙橋　俊文

要　旨

障害者の自立概念の研究は，障害者に自立を求める視点で自立概念を組み立てている内容が多い．特に知的障害者の自立については，自立行為を達成させる事を主目的に置いた内容が多くみられる．

本稿では，知的障害者にとって自立概念は必要か，どの様に自立概念を問い質す必要があるのか，実体験をもとに考察をすることを目的とする．

研究方法としては，時代毎の実体験を『障害を理解することへの葛藤』,『障害者差別との葛藤』,『相談できる相手いない事の閉塞感』,『自己抑制が行える事への追求』,『知的障害者の閉ざされた道．自立とは何か』,『知的障害者にとっての自己実現とは』と分類し，知的障害を持つ弟と人生と歩んだ実体験をもとに，その時代に捉えていた課題の抽出，それぞれの時代背景の出来事に対して，根源的な考察を行った．

その結果，時代背景的に 1970～2000 年までは，社会福祉の観点から知的障害者を社会で支える仕組みが不十分であり，知的障害者当事者，彼等を支える家族は，社会の中で生き難さを感じていた．社会の中で不完全な人間として知的障害者は扱われ，差別，偏見，そして，健常者から自立要求をされながら生きてきたことが明確となった．

障害者にとって求められる自立で重要な事は，他人の手を借りながらも，自分で意志決定を行い，自分にとって望ましいと考える生活を送ることである．

障害を持っている者も，自分の個は，自身が良く分かっているのである．

自立，自己実現は，結果として現れるものであり，他人が押し付けるものではないのである．

よって，知的障害者に自立，自己実現を要求することは不要なのである．

キーワード

知的障害者，知的障害者福祉，自立，自己実現，社会福祉，障害者差別・批判